

虹と日本文藝(十三)

——中世散文をめぐって——

小 序

本稿は、中世日本文藝中、和歌・連歌等韻文を除く散文、『梅尾明恵上人伝』『平治物語』『平家物語』『太平記』、狂言の「鬼瓦」とりあげ、そこに現れた〈虹〉について、比較文化的見地を混えつつ資料ごと個別的に小考を試みたい。また謡曲『羽衣』では、〈虹〉のバリエーションと目される「天人」「天女」「羽衣」の問題に、これまた比較文化的視野を混えつつアプローチしてみたい。

89

「西行上人常ニ來テ物語シ云、我哥ヲ讀事ハ、逢世ニ常ニ異也、花郭公月雪都ヲ万物ノ興口向テモ凡所有相皆是虚妄ナル事眼ニサヒキリ耳ニ満リ、又讀出所ノ哥句ハ皆是眞言非ヤ、花ヲ讀共ケニ花ト思事無、月

荻野恭茂*

詠スレ共實ニ月共不存、如是ノ任ニ縁ニ隨テ興ニ讀置所也、紅虹タナ引ハ虚空イロトレルニ似タリ、白日嚇ケハ虚空明ニ似タリ、然共虚空ハ本明ナル物ニモ非、又イロトレル物ニモ非、我又此虚空如ナル心ノ上ニ於種々ノ風情ヲイロトルト雖更ニ蹤跡無、此哥卽是如來ノ眞形軀也、去ハ一首詠出テハ一軀ノ尊像ヲ造ル思ヲ成ス、一句ヲ思ツ、ケテハ秘密ノ眞言ヲ唱ニ同、我此哥ニ依テ法ヲ得事有、若爰ニ不例ニ妄ニ人此詞學ハ大ニ可入邪路ニ云、サテ讀ケル、山深ヲサコソ心ハ通トモスマテ哀ハ知ムモノカハ

私注(一)『梅尾明恵上人傳』(二)上・25才(三)鎌倉時代

(四)鎌倉時代(五)喜海(六)『明恵上人資料』第一——高山寺資料叢書第一冊——(昭46、東京大学出版会)(七)P 302・303(八)興福寺藏本——線は稿者による。

〔考〕〈虹〉の出現・存続の状態を「タナ引」というのは、日本

主要文藝史上、また日本辞・類・音義書（Ⅱ40）〔68〕史上にも見られない、きわめて珍しいユニークな表現である。

〔紅虹〕は古代中国（cf. Ⅱ21）でも見あたりにくいようである。ただし、「紅蛭」や類似した「丹虹」（絳虹）〔赤虹〕（注）はある。

資料Ⅱで見られたごとく中国では驚くべき数多くの（虹）の熟語「一虹」「虹」等があったが、その可能性の中から強いて（紅虹）を選びとった所に、作者の感性と表現の特性がある。「紫雲」などの表現のごとく仏教臭のかかった（紫虹）〔紫蛭〕等でもよかつたはずである。すなわち比喩表現「紅虹タナ引ハ虚空イロトレルニ似タリ」中における色彩的対比関係を含む感性的選択である。その「鮮明さ」において、西洋などのように「黄」（cf. Ⅲ33私註）を第一に観ずる仕方とも相違している。よって個人的感性によると同時に、大きくいえば「非西洋的」ともいえよう。

〔注〕類書Ⅱ『初学記』（Ⅱ10）、『唐宋白孔六帖』（Ⅱ16）

「参 考」 2

卯剋。西方見五色虹。上一重黄、次五尺余隔赤色、次青、次紅梅也。其中間又赤色、甚広厚兮。其色映天地。小時鎖、則雨降。

私註（一）『吾妻鏡』（二）建保六年六月十一日（1218）（三）歴史書（四）鎌倉時代初期（五）著者未詳（六）『新訂増補国史大系』第32卷（昭39、吉川弘文館）（七）P 736（八）原文の漢字は旧字体。

〔考〕雲の比喩としては、先きに『続日本紀』（Ⅱ参考C）に「五色瑞雲」とあつたが、そのものずばりの「五色」の（虹）の記載としては最早期のものか。「五色」は、何でも五で割る中国文化の無自覚な言語的受容であろうが、しかしその内容は中国のものとも違い、また科学的には不可解である。案ずるに観察者が色盲又は老人性白内障でないとするれば、「五色」の「五」は「多」への転意で、「赤色」が二回出てくると、「甚広厚」状況からすると、いわゆる（二重虹）を同時にひつくるめて観察した記述かも知れない。とすれば、この（虹）は「赤」系の強い、いわゆる（赤虹）で、「青」は、虹と虹（一つは中国風にいえば「霓」）との間に垣間見られた「青空」の色とも考えられる。

いづれにせよ、変な、というよりは不可解な色彩配置の早朝の（虹）である。

90

去程に彼信西入道と申は、南家の博士、長門守高階經俊が猶子也。大業も遂ず、儒官にもいらす、非重代なりとて弁官にもなされず、日向守通憲とて何となく御前にて召仕れるが、出家の志ありし事は、御前へ（まいらんとて）びんをかきけるに、びんの水に面像をみれば、寸の頸劍のさきに懸て空なると云めんごうあり。大に驚思ひけるが、宿願あるに依て熊野へ参詣す。きりめの王子の御前にて相人に行逢たり。相して云、「御邊は諸道の才人也。但寸の頸劍のさきに懸て露命を草上にさらすといふ相あればいかに。」と云。行末はしらず、こしかたをば一事も違はずいひければ、「通憲もさ思ふぞ。」とて身の毛もよだつ。「さてそれをばいかにしてかのがるへき。」

と云は、「いせ、出家してもやのがれんずらん。それも七句にあまれば何とかあらむずらん。」とぞいひける。下向して御前へ参り「出家の志、候が、日向入道とよばれんは無下にうたてう覚え候。少納言を御免を蒙り候はばや。」と申ければ、「少納言は一人の人も成なんとして、左右なく取下されぬ官なり。いかゝあらむずらん。」と仰られけれ共、漸に申ければ、御ゆるされをかうふりて、やがて出家してんけり。二息ども或は中少將に至り、或は七弁に相並ばせ、ゆゑしかりしかば、墨の袖に身をやつし、今は露の命さへのがれがたし。昨日のたのしみ今日の悲み、諸行無常は只目の前に顯れたり。吉凶而繩の如しと云本文あり。少し違ふぞみえし。

九日の午に、信西白虹日を貫くと云天変の事に御所へ参りたれば、折節御遊なれば、かたはらなる持佛堂に御經よみて居たりけるに、香の火飛でよみたてまつる經の字二行焼給ふ。なを火飛で衣の袖焼にけり。信西大に驚て、天文は淵源を究たりければ、自これを勘見に、強者弱、弱者強しと云本文あり。此意をおもふに、君奢時は臣弱、臣奢時は君弱成と云詞也。今度は臣奢て君弱ならせ給ふべし、との由を、子共にも知せばやとおもへども、十二人ながら御前に列して御遊なれば、さましまいらせむも無骨なるべしとて、宿所に歸り、紀の二位をよび出し、「かゝる事あり。子共にも知せ給へ。信西は思むねありて奈良の方へ行なり。」との給は、紀の二位、同道にと歎かれけれ共、やう／＼にこしらへとめて、侍四人相具し、秘藏せられける鶴毛の馬に乗、舍人成澤を召具し、南都の方へ落られけるが、伊賀と山城の境田原が奥へぞ入給ふ。

私註 (一)『平治物語』(二)「上」・(信西出家の由来 並びに 南都落ちの事 付たり 最後の事)の前半部 (三)軍記物語 (四)未詳。十三世紀ごろ。(五)古来、葉室時長、中原師梁、源喻僧正の三説があつたが、近來いづれも顧みられなくなっている。

近代は、「儒者の作」 藤岡作太郎説、「叡山に關係あつた人の作」 野村八良説、がある。(六)の解説抄 (六)永積安明・島田勇雄校注『保元物語 平治物語』——日本古典文學大系31——(昭36・7、岩波書店)(七)P199(八)二九〇三九の頭注略。蓬左文庫本『平治物語』(近藤政美編、昭60、中部日本教育文化会)は「白虹日を貫く」とルビの他異同ナシ。谷崎潤一郎にこの段を基にした小説「信西」がある。(『谷崎潤一郎全集』第一巻『昭56、中央公論社』に所収)

〔考〕平治絵詞・陽明文庫蔵(一)本には、この「白虹日を貫く……」がない(頭注二八に云)が、これを含む①②③④は有機的に結びついて、この段の主人公・信西の死——クーデターにおける君の身がわり——への伏線となっている。陰陽道に儒教思想の混入した天文占いを過信し、かつその占いの海に溺死した信西の生きざまの中に「白虹貫日」は屹立する。人のトする凶祥に天の感ずる凶祥が加わって、この事件に関する深みと重みは増す。よってこの句はキーワード的にこの位置にあるのがよからう。

また、このケースの場合、『源氏物語』(〔85〕)のように、『史記』・『漢書』を始原とする「……太子畏之」までの引用はない。従つて文脈的な複雑さに絡る問題はない。ストレートで曲解もない素直な移入である。『戦国策』(〔42〕、類書に入つて『藝文類聚』(〔9〕、『太平御覧』(〔11〕)に出。また唐の沈彬の詩(〔13〕私註)。これらの系譜に属する。

『春秋緯文耀鉤』(『後漢書』では「白虹」の「白」を欠く。)に見られる「白虹貫牛山」(〔11〕私註)は活用されていない。

テ・トヲラス・秦舞陽・是ヲ見テ・
度ノ本意・難レ遂ヤ思ケム・ワナノ
振タリケレハ

源平盛衰記

天道免し給はずして、白虹、日を貫いて
通らざりける天變あり、

以上を見るに、「白虹貫日」をめぐる部分が、有ったり無かったり、「蒼天ゆるし給はねば」に当る句が、上に有ったり無かったり、それもAに付いていたりBに付いていたり、屋代本のように（「白虹貫日」が）底本（Ⅱ91）とはかなり異なる場面に援用されていたり、鎌倉本のようにA・B共「透ス」と誤記とみられるもの、等種々様々である。しかし、鎌倉本の「透ス」を、前後の文脈から「透ラス」の誤記だと仮定すれば、すべて底本のごとく「白虹日を貫いてとほらず」の意に類する文である。これらの現象は、大局的には、つまるところ、黒田彰のわが仮説としていう「中世史記」の領域に取り込まれる問題に属するものであろう。しかし、やや論点は、ずれて細くなるが、〈虹〉に関する比較研究資料を吟味してきたことから照らしてみると、『源平盛衰記』の作者は、多く『十八史略』（Ⅱ41私註参照）の影響を受け、『平家物語』の作者は、おおむね『史記』本文を通読してはいるようだが、その読み方として、多くその「注」に頼っているように思える。それも原典『史記』に忠実な鑑賞の上に成立している解（Ⅱ41私註参照）と思われる王劭系の解ではなく、烈士傳系の解を援用しているようである。その援用の基礎としての鑑賞が誤解によるものなのようでもある。『平家物語』作成上の創意によるものなのようでもある。これは、同じ軍記でも『平治物語』（Ⅱ90）の場合とも

位相を異にし、また『白虹貫日』をネグレクトした『太平記』とも異っている。かく軍記物語中에서도享受の仕方に微妙な相違があり、また王朝の『源氏物語』の場合（Ⅱ85）とも大きく違っていることは、作品世界の特色とも絡って興味のある現象である。

なお、『源氏』・軍記両者共、「白虹貫牛山」（Ⅱ11私註）については、素材的援用の見られないことからして、知らなかった、というより情報に欠けていたようである。

（注1）慶応義塾大学付属研究所斯道文庫編校『四部合戦状本平家物語』上（昭42、汲古書院）

（注2）彰考館蔵『南都本平家物語』《二・三・四・五・欠》（昭46、汲古書院）

（注3）大東急記念文庫蔵『延慶本平家物語』第一卷（昭39、古典研究会）

（注4）石田拓也編伊藤家蔵『長門本平家物語』（昭52、汲古書院）

（注5）山下宏明編『八坂本平家物語』（昭56、大学堂書店）

（注6）慶応義塾大学付属研究所斯道文庫編『百二十句本平家物語』（昭45、汲古書院）

（注7）水府明德会彰考館蔵『鎌倉本平家物語』（昭47、汲古書院）

（注8）佐藤謙三・春田宣編『屋代本平家物語』（昭45、桜楓社）

（注9）『源平盛衰記』（藝林舎、五十嵐書店）

（注10）場面が違うので、「見ル」主体が「秦舞陽」と特異。

（注11）もし誤記でないとしても、『史記』本文には存在しない語。

（注12）『中世説話の文学史的環境』中「Ⅱ軍記と注釈」（昭62、和泉書院）に詳述。

92

(注13)『烈《列も同》士傳』は前漢の劉向撰。現在は佚書。(開明書店輯印『二十五史補編』第四冊P316参考)
(注14)『源氏』の場合は、観念的援用であるが、軍記の場合は、文学の世界の中では、『史記』的記号観、すなわち天の感應現象観の付着した、自然的気象現象——である所。

かの大内と申すは、秦の始皇帝の都、咸陽宮の一殿を模して造られたれば、南北へ三十六町、東西二十町の外に、竜尾の置石を居多て、四方に十二門を建てられたり。いはゆる東には陽明・待賢・郁芳門、南は美福・朱雀・皇嘉門、西は談天・藻壁・殷福門、北は安嘉・伊鑑・達智門、この外、上東・上西に至るまで交戟の衛隊を守つて、長時に非常を誡めたり。三十六の後宮には三千の淑女粧を飭り、七十二の前殿には文武の百寮詔を待つ。紫宸殿の東西に、清涼殿・温明殿、北に當つて常寧殿。貞観殿と申すは、后町の北の御匣殿、校書殿と号するは、清涼殿の南の弓場殿なり。昭陽舎は梨壺、淑景舎は桐壺、飛香舎は藤壺、凝花舎は梅壺、襲芳舎と申すは、神鳴壺のことなり。萩戸・陣座・滝口戸・鳥曹司・縫殿・兵衛陣、左は宣陽門、右は陰明門。日花・月花の

七〇

両門は陣の座の左右に對へり。朔平門は北の陣、左右衛門の陣の両方には、建春門・宜秋門。春花門は白馬の陣、大庭といふはこの前なり。大極殿・小安殿・蒼竜楼・白虎楼・豊樂院・清暑堂、五節の宴酔・大賞會はこの所にて行はる。朝所、高御倉、中和院は中院、内教坊は雅樂所なり。御修法は眞言院、神食は神嘉殿、眞弓・競馬をば武德殿にぞ御覽ぜらる。朝堂院と申すは、八省の諸寮これなり。左近の桜散るころは、八重の宮城の雪の中に梅花を隠し、御溝水の末や匂ふらむ。右近の橘さきぬれば、昔を忍ぶ香を認めて、御階に繋る竹の台、幾代の霜を重ねらん。かの在原業平が弓・棚を身に添へて、神鳴さはぐ終夜、間荒なる蔵に居たりしは、官庁の八神殿、光源氏の大將の「如く物もなし」と詠じしは、朧月夜に如遊れし、弘徽殿の細殿、江相公の古、越の国へ下るとて、旅の別れを悲しんで「後会期遙かなり、櫻を鴻臚の暁の露に湿す」と、長篇の序に書きたりしは、羅精門の南なる鴻臚館の余波なり。鬼の間・直廬・鈴の縄、惡海の障子をば清涼殿に立てられたり。賢聖の障子をば紫宸殿にぞ立てられたる。東の一の間には馬周・房玄齡・杜汝晦・魏徵を懸けられたり。その二の間には諸葛亮・蘧伯玉・張子房・第五倫、

三の間には管仲・鄧禹・子産・蕭何、四の間には、伊尹・傅説・太公望・仲山甫をかけられたる。西の一の間には李勣・虞世南・杜預・張花、次の間には、羊祜・陳寔・揚雄・班固、三の間には桓榮・鄭玄・蘇武・倪寛、その四の間には董仲舒・文翁・賈誼・孫通、これらなり。画は金岡が筆を尽くし、讃の詞は道風が勢ひを振るひけるとぞ奉はる。鳳の臺天に翔り、虹梁雲に聳え、さしもしみじく造り双べたりし内裏の天災消すに便りなければ、回祿度々に及んで、今は徒らに礎のみ遺りける。あさましかりし事どもなり。

私註 (一)『太平記』(二)卷第十二「大内造造宮并びに聖廟の御事」のうち (三)軍記物語 (四)天正廿年(一五九二)ごろ (五)小島法師(説) (六)長谷川端校注・訳『太平記②』——新編 日本古典文学全集55——(二九九六・三、小学館) (七)P 29~31 (八)校注・訳、略。——線は稿者による。底本Ⅱ水府明德会彰考館蔵天正本。本文中の「さしもしみじく造り双べたりし内裏」のさまを髣髴させるため上掲の長き引用をなした。

〔考〕典拠本の「虹梁」の頭注には、「虹の形の梁」とあるがこれはコンパクトな名詩選でもある『文選』の西京賦・西都賦に見える形容である。さらに敷衍して記すならば、班孟堅の賦にある未央宮を中心として建ち並んでいる長安城の宮殿を叙しつ

つ「抗應龍之虹梁」(Ⅱ⑥-1)と表現されたものの系譜にたつ。

わが国では、現実には建築用語として、「材木者為虹梁之間」……虹梁ハ家ノ水府也。梁ノ上ニ曲折木を横也。即虹ノ形也……為杣取、令詠候畢」とある。「水府」は、龍宮など水神がいるといわれる伝説上の海底の都、のことであるが、「龍」も「ニジ」のオスの発展した文化的形象。「龍」は異界の水霊・動物神で、「タマ」(Ⅱ神威的パワー、至福、生命の永遠化、等)を抱いて「水府」に住み、水界―天界、を自由自在に往復。とすると、「虹梁」は「致福」(虹)本来の能力の一)の、あるいはその願望のシンボルとして観じられていたことになる。

持統天皇が新しく営んだ藤原宮の地に建てられ、当代仏教の中心の観を呈していた薬師寺の「東塔」の建築部分に、

繫虹梁

の語が見え、中世では、平氏の焼打ちによって焼失した東大寺を再興した重源(？~1195)の手になる天竺様の「東大寺南大門」の建築部分に、

大虹梁

の語が見え、弘安八年(1285)に造営された、唐様建築の代表としての、円覚寺「舍利殿」の建築部分に、

大虹梁・海老虹梁

の語が見える。この面では、〈虹〉の不吉観による忌避思想は見えない。かえって、〈虹〉が金を吐いたりする(Ⅱ⑧⑨⑩⑪⑫中)財宝産出型の、ひいては致福型の、プラスの〈虹〉観によっているのであろう。

いずれにしても、高野大師をして、日本国という小国の主として、その徳に相応しからずと嘆き思わしめたほどの、豪奢にして壮麗な建築物の、その一翼を担うもの、あるいはその象徴的形容の一つであるようである。

後醍醐天皇の建武新政のために、建武元年（1334）、「日本国の地頭・御家人の所領の得分二十分の二」（建武年間記）を懸召し、秦の始皇帝の咸陽宮にならって、（重税によるとはいえ）富と文化の粋により綺羅を尽くして増築された大内裏空間を叙しつつ、その末部の締めめの表現の中に、「鳳の豊天に翔り虹梁雲に聳え」と「虹梁」が出てくる。そこには巧みに活喩・対句法・縁語法が駆使されており、「虹梁」という建築用語に宿る（虹）の生態は、空間的壮麗美を打ち出す文藝的イメージ構築にたくましく貢献している。そして末尾の無常観的詠嘆の落ちによって、さらに遡及して、建武中興、帝王を戴くおごれるものの絢爛が高揚の筆致の逆説として、具象的に強調されてくる効果を生んでいる。

（注一）『庭訓往来註』——室町末期写——（石川松太郎監修『往来物大系』第七巻《平4、大空社》所収）

92₂

東南ニハ嶺谷ニ崎ノ峻ヲ時テ、西北ニハ洪河涇渭ノ深ヲ遡ラシテ、其中ニ回三百七十里高サ三里ノ山ヲ九重ニ築上テ、ロ六尺ノ銅柱ヲ立、天ニ鐵ノ網ヲ張テ、前殿四十六殿・後宮三十六宮・千門萬戸トヲリ開キ、麒麟列鳳凰相對ヘリ。虹ノ梁金ノ鑑、日光ヲ放テ樓閣互ニ映徹シ、玉ノ砂・銀ノ床・花柳影ヲ浮テ、階蘭品々ニ分レタリ。

私註（一）『太平記』（二）卷第二十六・（三）妙吉侍者事付秦始皇帝事（中）（三）軍記物語（四）建徳二（1377）ごろ（五）小島法師（説）（六）後藤丹治・峯田喜三郎校注『太平記』三——日本古典文学大系34——（昭37、岩波書店）（七）P 46（八）——線は稿者による。一二〜一九頭注略。底本Ⅱ慶長八年古活字本。

〔考〕92₁中、大内裡が模されたと記している、秦の始皇帝の咸陽宮Ⅱ阿房宮、の様を描出している中に「虹ノ梁」は出てくる。ただ92₁と違うのは、「金ノ鑑」と一対になっていることである。組み合わせられた素材は異なるけれども、建築物の壮麗さを表出すべきキーワードの一つになっていることは同様である。

92₃

南方には、この地震に諸国七道の大伽藍どもの傾き破れたる体を聞くに、天王寺の金堂ほど崩れたる堂舎はなく、紀州の山々ほど裂けたる地もなければ、これ余所の表事にてはあらじと御愼みあつて、さまざまの御祈りどもを始めらる。すなはち般若寺の円海上人勅を承つて、天王寺の金堂を作ら

るに、希代の

奇特ども多く聞

えにけり。まづ

大廈・高堂の構

へなれば、安

芸・周防・紀伊

国の杣山より大

木を取らんずる事、一、二年の間には道行きがたしと覚え

るに、二人して抱き余す程なる檜木の柱、六、七丈なる冠木

三百本、何くより来たるとも知らず、難波の浦に流れ寄

塩の干潟にぞ留まりける。暫くは主ある材木にてぞあるら

と、尋ねくる人を待たれけれど、求めくる人もなかりければ、

さては天竜八部の人力を助け給ふにてぞあるらんとて、虹の

梁、鳳の薨、品々にこれをぞ用ひける。



大竜二つ、仏舍利を求めて四天王と戦う。

私註 (一)『太平記』(二)卷第三十六「大地震」並びに諸国怪異

並びに四天王寺金堂倒るる事」のうち(三)軍記物語(四)天

正廿年(二五九二)(五)小島法師(説)(六)長谷川端校注・

訳『太平記』(七)(二九九八・七、小学館)(七)P 222~223(八)

校注・訳、略。——線は稿者による。底本Ⅱ水府明德会彰考館

蔵天正本。

〔考〕「虹の梁、鳳の薨」と〔92〕とほぼ同じ、すなわち壮麗を

示す類型的表現を駆使してはいるが、〔92〕の帝王の大内裏造宮

のケースと違って、地震によつて崩れた天王寺金堂造宮のケー

スの叙述であることもあってか、表現に〔92〕の場合ほどは精彩

が見られず、したがって格調・威勢が乏しく控え目である。

とまれ、これら壮麗さを讃える美意識は、狂言中、「どれか

ら見てもなりのよい御堂」(〔94〕構築のファクターとして眺

められ、近世に入つて仮名草子の『犬枕』(〔95〕に「大きくで

良き物」とされ、絢爛たる歌舞伎の舞台の大道具(「名歌徳三

舂玉垣」〔10〕)の一つに受け継がれてゆく。

以上三箇所が、〈虹〉と関係しているものと思うが、中世の

エンサイクロペディアとも言われる『太平記』の世界に、不思議

なこと、『源氏物語』(〔85〕、『平治物語』(〔90〕、『平家

物語』(〔91〕に見られた、著名な「白虹貫日」の語句の移入

が見られないことである。思うに、『太平記』の場合、それと

同等の現象が満ち満ちすぎて、その移入の効果は、かえって色

褪せてしまうことに作者が気づいていたことによる——のである

ろうか。

羽衣

シテ 天人
ワキ 漁夫・白竜
ワキ連 同行の漁夫

1 (まず松の作り物に羽衣を) (「一声」の雄子でワキ・ワキ連掛けて正面先に据える) (「が狂場。正面先に立って騒ぐ」)

「一声」 「一セイ」 ワキ連 風早の、三保の浦曲を漕ぐ

舟の、浦人騒ぐ波路かな。

「名ノリ」 ワキこれは三保の松原に、白竜と申す漁

夫にて候

「サシ」 ワキ連 萬里の好山に雲忽ちに起こり、一楼の

明月に雨はじめて晴れり、げにのどかなる時しもや、

春の気色松原の、波立ち続く朝霞、月も残りの天の

原、及びなき身の眺めにも、心空なる気色かな。

「下ゲ哥」 ワキ連 忘れめや、山路を分けて清見瀉、遙

かに三保の松原に、立ち連れいざや通はん、立ち連

れいざや通はん。

「上ゲ哥」 ワキ連 風向かふ、雲の浮き波立つと見て、

雲の浮き波立つと見て、釣りせで人や帰るらん、待

て暫し春ならば、吹くものどけき朝風の。松は常
磐の聲ぞかし、波は音なき朝風ぎに、釣り人多き小

舟かな、釣り人多き小舟かな。 (ワキ連は脇座奥に着座)

2 (ワキは常座に立つて詞、その終りに作り物か
ら羽衣を取りあげて両手に掲げ、脇座へ行く)

「□」 ワキわれ三保の松原に上がり、浦の気色を眺む

るところに、虚空に花降り音楽聞こえ、霊香四方に

薫ず、これ只事と思はぬところに、これなる松に美

しき衣掛かれり、寄りて見れば色香妙にして常の衣

にあらず、いかさま取りて帰り古き人にも見せ、家

の宝となさばやと存じ候

3 (シテが幕から呼び掛けて狂場。脇座に立つたワキと問答し
ながら常座に入り、地の下ゲ哥・上ゲ哥で悲しみを示す)

「問答」 シテのうその衣はこなたのにて候ふなにし

に召され候ふぞ ワキこれは拾ひたる衣にて候ふ程

に取りて帰り候ふよ シテそれは天人の羽衣とて、

た易く人間に与ふべき衣にあらず、ものごとくに

置き給へ ワキそもこの衣のおん主とは、さては天

人にてましますかや、さもあらば末世の奇特に留め

置き、國の宝となすべきなり、衣を返すことあるま

じ シテ悲しやな羽衣なくては飛行の道も絶え、天

上に帰らんこともかなふまじ、さりとは返し賜^{たま}ひ給へ。ワキこのおん言葉を聞くよりも、いよいよ白竜^{うりゅう}力を得、もとよりこの身は心なき、天の羽衣^{はうい}取り隠し、かなふまじとて立ち退^のけば。シテ今はさながら天人も、羽なき鳥のごとくにて、ワキ上がらんとすれば衣なし、シテ地にまた住めば下界^{げかい}なり、ワキとやあらんかくやあらんと悲しめど、シテ白竜衣を返さねば、ワキ力及ばずシテせんかたも

「上ゲ哥」 地涙の露の玉露、挿頭の花もしをしをと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや

「下ノ詠」 シテ天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路惑ひて、行くへ知らずも

「下ゲ哥」 地住み慣れし、空にいつしか行く雲の、羨ましき気色かな。

「上ゲ哥」 地迦陵頻伽の慣れ慣れし、迦陵頻伽の慣れ慣れし、聲今さらに僅かなる、雁がねの帰り行く、天路を聞けば懐かしや。千鳥鷗の沖つ波、行くか帰るか春風の、空に吹くまで懐かしや、空に吹くまで懐かしや。

4 (ワキは脇座、シテは常座に立つて問答。ワキから羽衣を買って後見座にクシロギ物着をする)

「問答」 ワキおん姿を見奉れば、あまりにおん痛はしく候ふほどに、衣を返し申さうするにて候。シテあら嬉しやさらばこなたへ賜はり候へ。ワキ暫らく、承り及びたる天人の舞樂、只今ここにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ嬉しやさては天上に帰らんことを得たり、この喜びにとでもさらば、人間の御遊の形見の舞、只今ここにて奏しつ、世の憂き人に傳ふべしさりながら、衣なくてはかなふまじ、さりとてはまづ返し給へ。ワキいやこの衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にや上がり給ふべきシテいや疑ひは人間にあり、天に偽りなきものをワキあら恥づかしやさらばとて、羽衣を返し与ふれば「物着アシライ」(シテは後見座で物着。ワキは脇座に) ば「掛ケ合」シテ少女は衣を着しつ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ天の羽衣風に和し、シテ雨に潤はふ花の袖、ワキ一曲を奏でシテ舞ふとかや

「次第」 地東遊の駿河舞、東遊の駿河舞、この時や始めなるらん。

5 (シテが大小前に立つてクリ・サン・クセ) になつてシテはほぼ定型的な動きで舞う

「クリ」 地それひさかたの天といつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、ひさかたの空とは名付けたり。

「サシ」 シテしかるに月宮殿の有様、玉斧の修理としなへにして、^P 白衣黒衣の天人の、数を三五に分かつて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす、

シテわれも数ある天少女、^Q 地月の桂の身を分けて、假に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。

「クセ」 地春霞、柵引きにけりひさかたの、月の桂の花や咲く、げに花鬘、色めくは春のしるしかや、面白や天ならで、ここも妙なり天つ風、雲の通ひ路吹き閉ちよ、少女の姿、暫し留まりて、この松原の、春の色を三保が崎、月清見湯富士の雪、いつれや春の曙、類ひ波も松風も、のどかなる浦の有様。その上天地は、なにを隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ君が代は、天の羽衣稀に来て、^R 地撫つとも尽きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌、^S 聲添へて数々の、^T 簫笛琴箏篳、孤雲の

ほかに満ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、緑は波に浮島が、^U 払ふ嵐に花降りて、げに雪を回らす、白雲の袖ぞ妙なる。

6 (シテは「序ノ舞」を舞う。静かだが明) かるい舞で、普通は四節に舞われる

「詠」 シテ南無帰命月天子、^V 本地大勢至。地東遊の舞の曲。〔序ノ舞〕

7 (以下シテは、ノリ地で動きを続け、「破ノ舞」(ごく短) い舞)を舞い、^W 叙景の動きを見せて、常座で留める

「ノリ地」 シテあるひは、^X 天つみ空の、緑の衣、

地または春立つ、霞の衣、シテ色香も妙なり、少女の裳裾、^Y 地左右左、左右颯々の、花を挿頭の、天の羽袖、^Z 靡くも返すも、舞の袖。〔破ノ舞〕

「ノリ地」 地東遊の、数々に、東遊の、数々に、その名も月の、^{AA} 宮人は、三五夜中の、空にまた、満願真如の、影となり、^{AB} ご願圓滿、^{AC} 國土成就、^{AD} 七宝充滿

の、宝を降らし、^{AE} 國土にこれを、^{AF} 施し給ふ、さるほどに、時移つて、天の羽衣、浦風に柵引き柵引く、三保の松原、^{AG} 浮島が雲の、^{AH} 愛鷹山や、^{AI} 富士の高峰、^{AJ} 幽かになりて、^{AK} 天つみ空の、^{AL} 霞に紛れて、^{AM} 失せにけり。

私註 (一) 謡曲「羽衣」 (二) 「羽衣」全 (三) 謡曲台本 (四)

未詳 (五) 未詳 (六) 横道萬里雄・表章校注『謡曲集』下——日本古典文學大系41——(昭38、岩波書店) (七) P 326、329

(八) 底本『宝生流現行謡本』七、三四・一、四三の頭注略。

——線は稿者による。「羽衣」〈霓裳〉の出でくる作品は、謡曲では他にも多数ある(『謡曲大観』別巻「索引」)が、本資料を代表として採りあげる。

〔考〕本資料は、いわゆる「天人説話」を原資として、それがさらに文藝化された戯曲である。

「天人説話」には大きく分けて次の三つがある。

(一) 〈虹—天女〉型

(二) 〈天人女房〉型

(三) 「白鳥処女」型

これらの中に、また少しづつバリエーションがある。

これをこれまで出てきた資料でみれば、

『古事記』の「天の日矛」(一)——離別—被祭祀型

(二) 〔71〕

逸文『丹後国風土記』

(一)——被追放・放浪—被祭祀型

(二) 〔78〕

逸文『近江国風土記』

(三) + (二)——離別型

(二) 〔79〕

『竹取物語』(二) 〔82〕

(一) + (三)——離別型 + 交信願望

である。この例にならば、本資料、

『謡曲羽衣』(二) 〔93〕

(一) + (三)——離別型

となろう。『竹取物語』にはこれに「もののあはれ」にくるんだ「優美」が加わり、本資料は、それらに「清麗」がさらに加

わっている。

そのことについて資料に即して分析的に吟味してみると次のごとくである。

Aの「三保の松原」は、中の部に見える「東遊の駿河舞」や結末部の借景的背景たる、秀麗雄大な「富士(の雪)」・「(愛鷹や)富士の高峰」等と呼応するものであろう。特に「富士」は、『竹取物語』の結末部からの連想が大きかったのではなからうか。それゆえ、天の日矛の一団が近江・丹後方面にこぼして行ったとおぼしき「羽衣説話」を古典の名作『竹取物語』が、作者をして富士を遙かに仰ぐ「三保の松原」へと誘ったとも言える。

しかし、その断片的素材は、民間伝承的に東国へも伝播したのか、あるいは並行発生したのか、はわからないが、かなり古くから存在していたことは事実のようである。

佐成謙太郎著『謡曲大観』第四卷「解説」には、駿河国に天人の天降ったことは、後拾遺集に、

式部大輔資業伊予守に侍りける時、彼国の三島明神にあづま遊びして奉りけるをよめる

うど浜に天の羽衣昔きてふりけむ袖やけふのはふりこ 能因法師とあり、うど浜は有度浜と書き、三保の松原に隣接した所で、童蒙抄にも、

昔駿河国の有度浜に、神女あまたくだりて、舞ひ遊びをうつして、今の世に駿河舞とて、東遊にするなり。

とあるから、この地にも古くから天女天降りの説話が伝へられてゐたに違ひない。殊に神社考によれば、

三保松原者……殆非凡境、誠天女海客之所遊息也、按、風土記、

古老傳云、昔有神女、自天降來、曝羽衣於松枝、漁人拾得而見

之、其輕軟不可言也、所謂六銖衣乎、織女機中物乎、神女乞之、

漁人不與、神女欲登天、而無羽衣、於是與漁人爲夫婦、

盡不得已也、其後一旦、女取羽衣乘雲而去、其漁人亦登仙云。

これならば本曲に甚だ近いもので、このような駿河風土記の逸文が、徳川時代まで伝つてゐたとすれば、謡曲作当時に勿論現存してゐて、作者はそれを本としてこの一篇を脚色したものであろうか。」とある。

この伝・駿河国風土記逸文は、天降つた神女は一人のようであるから、これは、(I)Ⅱ(虹→天女)型であり、そのバリエーションとして「離別型」に「天人登仙型」が付加されているものである。(この存在を許容すれば、本資料は一部生かされ一部捨てられてゐる。)

Bに「白龍」とあるが「龍」は「雷」^{ロニライルセ}から発生したもののようであるが、(21)(考)、(虹)と同系の水霊である。また、もともとはその形状からみて、「雷」+「電」^{イナヒカリ}+(虹)+「蛇」+「龍卷」^{タツマキ}、の觀察による空想的産物であろうが、雄的男性的性格が濃く、おおむね後には「龍宮城」のごとく「海」と結びつけられたので、この作品の「漁夫」の名には、——能特有のそれが憑依された神霊的存在として——ふさわしい。

「白龍」の「白」は(白虹)よりの類推であろう。またそれは神霊的色彩をより濃く帯びたもの(白蛇に通う)である。しかし、ここでは、それと同時に、色彩豊かな(ニジの精)でもある天女との色彩的コントラストを効果ならしめるための一種

のレトリックとも考えられる。先引の「駿河国風土記」の存在を仮りに許容するとすれば、「其漁人亦登仙」と結末部にあり「白龍」の名はそれよりの遡及的発想ともとれる。龍は仙界へ昇龍し登龍するという。古代中国ではおおむね「龍舟」で(33注1)仙界(天界・他界)への渡し舟的存在にやや位相を異にする場合もあるが……。Cは、(虹)の出現のおおむね前提であり、Dは(朝虹)のたつころの天体環境である。Eは「衣」であり「色香妙」である。これも(虹)↓(霓裳)のイメージが濃い。白鳥系のものではない。E・Gは「羽衣」で、その「羽」は「白鳥」型のものである。(ただし、その機能は(虹)↓(霓裳)とも共通する)Hには『竹取物語』などで醸成された(もののあはれ)を解する優しさがある。原資(Ⅱ)(虹)・「白鳥」(両型)のもつ厳しさとは異なる、日本的温和なもので、明らかに原資とは質的变化がみられる。Iは(虹)の属性たる「吐金→致富・致福」能力に関係している。Jは天界(他界)のものの特性、(I)(Ⅱ)型に共通する。強いて言えば、「純白」の白鳥のイメージから(Ⅲ)型の感じが強かるう。Kの(霓)は(雌ニジ)であり、「羽衣」の「羽」は鳥の一部である。とすれば(I)と(Ⅱ)の混融したものである。Lは(Ⅲ)型の、Mは(I)型の要素が濃い。Nの裏には、イザナギ・イザナミのミコトの立たし給うた「天の浮橋」、すなわち(虹)のメタファーが隠れている。Oには「霓裳羽衣曲月宮伝来伝説」を匂わせている。(Ⅲ)よりやや(I)の要素が濃い。Pの「天人の多数」は(Ⅲ)の要素が濃い。また「白衣・黒衣」は、チャイコフスキー作曲のバレエ「白鳥の湖」中の「白鳥・黒鳥」を想起させる。Qのとりどりの彩色・

「裳裾」などは〈霓裳〉に関連し、(I)Ⅱ〈虹―天女〉型の要素を見せている。RはIと同様の「吐金↓致富・致福」能力の発現であり、まさに(I)型の特性である。

以上を整理すると

(I) 〈虹―天女〉型 B C D I J M N O Q R

(II) 〈天人女房〉型 ナシ

(III) 「白鳥処女」型 E G J L P

となる。よって、本資料「謡曲羽衣」は、

(I) + (II) —— 離別型 を骨格としつつ、伝統美たる〈もののはれ〉でくろんだ清麗・優美で肉付けされている、ということになるうか。

因みに、自然環境として、三保の松原に〈虹〉のたちやすいことの類推は、北原白秋の童謡集『二重虹』の巻末に「二重虹と云へば、この小田原の山や海にはよく二重虹が立ちます。こんなにもまた朝や夕がたに虹の立つところはあまり無いでせうと思ひます。それは明るくて綺麗です。」とあり、これは小田原のことで、伊豆半島をはさんではいるが、極く近隣であり、その類推が可能である。

従って、本作品は、〈虹〉の動静の矚目から発想された、美しい幻想による説話・伝説を下敷きとして、みごとに芸術化されたものであるう。

(注1) 16 私註(白楽天の詩) 参照。

(注2) 北原白秋著『二重虹』——繪入童謡第七集——(大15・3、アルス)

94

大名サアサア 来い来い。出ずき 太郎冠者参ります参ります。あつと 大名この御堂は、飛騨の工匠が建てた御堂じゃというが、どれから見ても、なりのよい御堂ではないか。太郎冠者まことにどれから見ましても、なりのよい御堂でござる。大名 脇道から常盤へ行き、また梁・蛙股・破風。めてな、ヤイ太郎冠者。太郎冠者で常盤何事でござる。大名あの破風の上にある物はなんじゃ。太郎冠者こなたはあれを御存じござらぬか。大名イイヤ 何とも知らぬ。太郎冠者あれは鬼瓦でござる。大名何 鬼瓦。太郎冠者さようでござる。大名ウーン、鬼瓦という物はいかめな物じゃなあ。太郎冠者さようでござる。大名あの鬼瓦をようよう見るに、誰やらが顔によう似たではないか。太郎冠者イヤ申し、あの鬼瓦に似た顔があるものでござるか。

私註(一) 狂言「鬼瓦」(二) 大名狂言・「鬼瓦」中部(三) 狂言(四) 室町時代〜江戸時代(五) 元作者Ⅱ未詳。伝承者Ⅱ家元弥右衛門(金春座付)(六) 小山弘校注『狂言集上』——日本文学大系42——(昭35、岩波書店)(七) P183(八) 底本Ⅱ大蔵流山本東次郎の先々代、山本東の書写した本——線は稿者による。「虹梁」は注二四に「建築用語。反りを持たせて作られた梁」とある。注二二・二三・二五〜二八略。

〔考〕「虹梁」が「なりのよい」御堂、に貢献している。すなわち「建築美」の一翼を担っているのであって、〈虹〉のプラス面の発露である。

12……は、『梶山女学園大学研究論集』連載中の資料の通し番号である。

* 文化情報学部 文化情報学科